

ルシャ川、ポンベツ川付近における海岸植生調査の結果

(平成 21 年度知床世界自然遺産地域生態系モニタリング調査業務報告書より、一部改変)

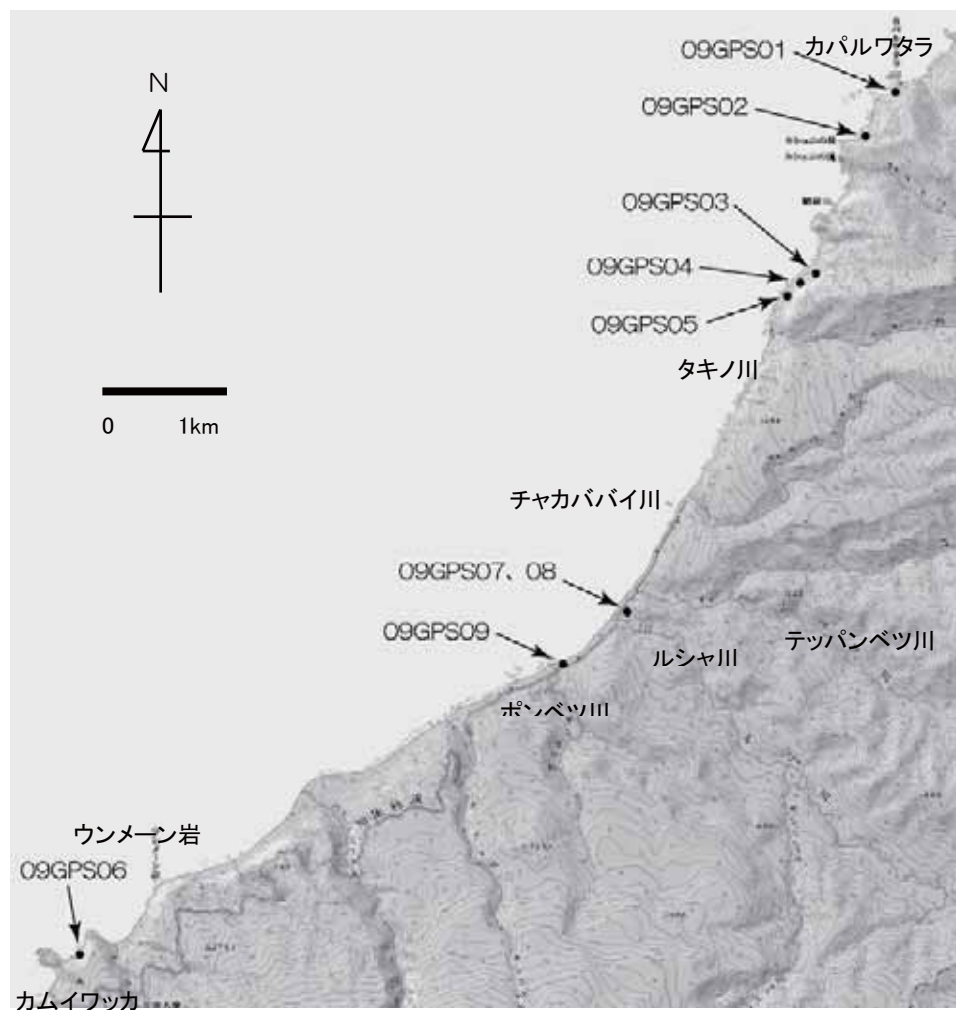
1. 調査地

1) ルシャ川河口右岸 (09GPS07 と 08)

ルシャ川河口右岸に台地が突き出している先端部分で、ここでは、斜面下部に位置し、海岸の平坦部になる直前の場所に 2 方形区 (09RU01 と 09RU02) を設定した。すでにハンゴンソウの優占性が著しく高くなっていた。また、09GPS07 の 09RU01 より海岸線にほぼ平行に 20m ほどルシャ川河口によった地点に 09RU03 を設定し、これより海岸線に向かっておよそ 10m おきに 2 方形区 (09RU04、09RU05) を設定した。09RU03 以降の方形区は、いずれも外来牧草や踏圧耐性の高い種によって構成されていた。

2) ポンベツ川河口右岸 (09GPS09)

ポンベツ川河口右岸で、背後の丘と海岸の平坦部が接する部分の平坦部にクマイザサとハンゴンソウが優占しており、ここに 09RU06 と 09RU07 を設定した。また車両の通行跡を挟んで汀線側に 09RU08 と 09RU09 を設定した。09RU09 は汀線に向けてほぼ最前線の群落である。



2. 結果

ルシャ川河口部とポンベツ川河口部の植生はすでにシカによって著しく採食され、大きく変質していた。この地区の調査結果は、1980年代初頭でシカの影響がほとんどなかった時代の佐藤の記録（北海道生活環境部自然保護課 1981）と対比させて、付表 3 にまとめた。また景観の状況も文末の写真資料の写真 41 と 42 に掲載した。

付表 3 に示したように、1980年代にルシャ川とその周辺（チャカババイ川河口部からウブシノッタ川河口部の区間）において確認された群落は、海浜植物群落、海岸断崖植物群落、海岸断崖上部草原群落、および崩壊地群落であった。このうち海浜植物群落はさらに、汀線に近い部分からおおむねハマハコベ群落、ハマエンドウ-エゾオグルマ群落、ハマニンニク群落、ハマナス群落の順でゾーネーションを形成して分布していた。海岸断崖植物群落としては、ハマツメクサ群落、シコタンハコベ群落とイワベンケイ-ユキワリコザクラ群落が確認されていた。また海岸断崖上部草原群落としてはナガバキタアザミ-エゾノコギリソウ群落、また崩壊地群落としてはオニシモツケ群落が記録されていた。ただし、ルシャ川そのものに限ると、海浜植物群落に含まれるハマハコベ群落とハマナス群落のみが記載されている。しかし、これらの 2 群落は礫浜の波打ち際にゾーネーションを形成して分布する群落であることから、より後方のルシャ川にそった河原、ないし台地と山腹の斜面においては、異なる群落が分布していたものと推察される。今回の調査でも方形区を設定して記載したように、シカの採食がほとんど見られない現状のタキノ川以北の同様の斜面にはキク科、セリ科や在来のイネ科草本などから構成される高茎草原やオオイタドリ主体の崩壊地群落が分布することを勘案すれば、ルシャ川河口域のこうした立地でも、海岸断崖上部草原群落や崩壊地群落が分布していたものと推察される。

上記より約 30 年が経過した今回の調査では、ルシャ川河口部においてもポンベツ川河口部においても汀線に向けた植生のほぼ最前線にエゾオグルマが優占する方形区があつて 1980 年代と共通するものの、これより内陸に分布していたと考えられる海岸断崖上部草原群落や崩壊地群落はまったく見られなかった。その一方で、シカの不食草であるハンゴンソウが優占している方形区や、オオスズメノカタビラ、コヌカグサやアメリカオニアザミなどの外来種が優占する方形区が確認され、シカの採食の著しい知床岬と同様の状況が確認された。

